

中学校体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルとの関係

The Relationship between Motivational Climate and Psychosocial Skills in Junior High School Physical Education Classes

榊 本 雄 一* 中須賀 巧**
YUICHI Masumoto TAKUMI Nakasuga

本研究の目的は、体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係について検討することである。中学生214名を対象に質問紙調査を実施した。動機づけ雰囲気を独立変数に、心理社会的スキルを従属変数としたモデルの妥当性を共分散構造分析により検証した。分析の結果、①男子および女子ともに熟達雰囲気から心理社会的スキルの全てのスキルに正の影響を示した。②男子は成績雰囲気から心理社会的スキルの「思考力」「自己効力感」「コミュニケーション」に正の影響を示した。③女子は成績雰囲気から「感謝の気持ち」に正の影響、「協調性」に負の影響を示した。以上のことから、心理社会的スキルを高める要因として熟達雰囲気を中心とした授業が必要になることが明らかとなった。一方で成績雰囲気の心理社会的スキルを高める有効性は一部の生徒に認められるが、すべての男女に共通しないことから、成績雰囲気を強調した授業づくりは抑える必要がある。

キーワード：熟達雰囲気、成績雰囲気、体育授業

Key words : mastery climate, performance climate, physical education class

I. はじめに

心理社会的スキルは、スポーツ活動を通じて獲得や向上が期待される建設的で望ましい行動や態度、さらに心理的能力（ストレス対処、忍耐力、協調性など）を包括的に表す用語として用いられる（佐々木, 2019）。学校教育場面において運動・スポーツ活動を通じた心理社会的スキル獲得に関する研究には、渋谷ほか（2018）の高校生を対象に運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの般化について検討しているものがある。そこでは、運動部活動と日常生活のそれぞれの場面で心理社会的スキルがどの程度獲得されているのかを縦断的に測定（3回調査を繰り返し実施）している。その結果、運動部活動で部員が獲得した心理社会的スキルは、日常生活のあらゆる場面においても発揮される可能性があることを確認している。このことは、運動部活動のように運動・スポーツ活動と部員同士の関わりを通じて生徒一人ひとりの心理社会的スキルは培われ、そのスキルが日常生活のあらゆる場面でも活かされているのではないかと考えられる。また運動・スポーツ活動を通じて培われた心理社会的スキルの高まりは、自己効力感の向上に貢献することも確認されている（西田ほか, 2014）。ただし、ある状況で有効な心理社会的スキルを獲得していたとしても、日常生活場面で実際にそのスキルが利用されなければ、行動は変化しないという指摘もある（上野, 2011）。以上のことから、実際に心理社会的スキルを日常場面で発揮されるのかという課題は残しつつも、運動・スポーツ活動を通じて生徒の心理社会的スキルを獲得させることは、良好な日常生活を送るための基礎

作りの一側面として重要であると考えられる。しかし、学校教育全体を考えると運動部活動はその一部にすぎず、他の活動や教育においても心理社会的スキルが獲得される可能性はある。例えば、運動やスポーツ活動を素材に学習内容を設定する教科として体育授業が挙げられる。体育授業は、スポーツ種目を専門的に取り組むために集まった成員で構成される運動部活動とは異なり、運動が得意な生徒もそうでない生徒も、様々な運動やスポーツ種目に触れながら、その価値や魅力について学習していく。そういった体育授業場面に着目し、生徒の心理社会的スキルがどのように獲得されるのかについては殆ど検討されていない。僅かな先行研究ではあるが、例えば社会的スキルと体育授業の適応状態との関係について調べている研究（佐々木, 2004）では、体育授業に対して適応感が高い生徒（クラスメイトとも良好な関係が築けており、学習内容も理解できていく）ほど、そうではない生徒に比べて社会的スキルを獲得していることが確認されている。これは、体育授業の中で学習する内容を十分に理解し、なおかつクラスメイトとも良好な関係を築くことが、社会的スキルの獲得を促進することを示唆している。この研究では生徒個々の体育授業に対する適応状態に着目されているが、どのような体育授業雰囲気を通してスキルが向上する（あるいは低下する）のかという授業環境の側面からスキル向上については明らかにされていない。

それでは、どのような体育授業の中で生徒の心理社会的スキルを高めることができるのだろうか。体育心理学領域では、教師やクラスメイトなど重要な他者によっ

* 明石市立魚住中学校

令和3年7月9日受理

** 兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース 准教授

てつくられる構造と定義される動機づけ雰囲気によって体育授業の雰囲気を捉えようとする研究が盛んに行われている。体育授業における動機づけ雰囲気には、熟達雰囲気（個人レベルでの上達や努力することが高く評価され、皆が協力的に活動に取り組める雰囲気）と成績雰囲気（他者との競争や勝つことが高く評価され、好成绩や高順位を目指して取り組む雰囲気）の2つの側面がある（藤田・杉原, 2007）。磯貝（2012）は、Ames and Archer（1988）を参考にし、上記の2つの雰囲気を強く認知する生徒の特徴として次のようにまとめている。技能の上達と進歩が成功の基準である熟達雰囲気を強く認知した生徒は、努力することや技能習得のプロセスを大切にしているため、挑戦することや真剣な取り組みによって満足感を得ることができる。一方、他者よりも好成绩をとることが成功の基準である成績雰囲気を強く認知する生徒は、他者に勝つことや高順位を取ることが周囲に自己の能力の高さを示すことになるため、他者より優れた結果を示すことによって満足感を得ることができる。このように、動機づけ雰囲気の認知によって、生徒が何に満足感を得るのかも異なることが示されている。藤田・杉原（2007）は、過去の体育授業において熟達雰囲気を認知している生徒の方が運動に対して内発的な動機づけが高い傾向にあり、さらに運動にも積極的に参加することを確認している。これらのことから、体育授業における動機づけ雰囲気は、その認知の仕方によって、その後の生徒の感情や認知、行動に異なる影響を与えることが確認されている。しかし先に述べた通り、心理社会的スキルが体育授業を通して高められる可能性はあるが、どのような体育授業の雰囲気の中で高めることができるのかについては十分に検討されているとは言えない。また体育授業における動機づけ雰囲気の認知には男女差があることも確認されている（中須賀ほか, 2017）。

以上のことから本研究では、体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係について検討することを目的とした。本研究の目的を遂行するにあたり、体育授業における動機づけ雰囲気を独立変数に、心理社会的スキルを従属変数に付置した仮説モデルを設定した。なお、先述した体育授業における動機づけ雰囲気研究（中須賀ほか, 2017）において男女によって雰囲気認知には差があることが指摘されているため、仮説モデルの検討は男子と女子それぞれで行うこととした。

II. 方法

1. 調査対象および調査時期

中学校3年生214名（平均年齢14.4 ± 0.4歳、男子108名、女子106名）を対象に行った。調査時期は、2019年7月であった。

2. 調査手続きおよび倫理的配慮

研究の趣旨および調査票の内容を学校長と保健体育科主任に説明し、調査実施について学内職員会議に諮

り、調査協力の許可を得た。調査票の表紙には、調査がテストではなく、学校の成績には影響をするものではないこと、また個人の調査結果の秘密が守られること、研究目的以外で公表しないことを明記した。無記名式の調査票は、体育授業内で保健体育教員から配布された。記入済みの調査票は保健体育教員によって一括管理され、研究者本人が中学校を訪問し、手渡しによって回収された。

3. 調査内容

3-1. 心理社会的スキルの測定

生徒の心理社会的スキルは、洪倉ほか（2018）の運動部活動における心理社会的スキル尺度の教示文を「現在行っている運動部活動の中で」から「現在の体育授業の中で」に修正し、用いた。この尺度は、「忍耐力」、「集中力」、「思考力」、「ストレスマネジメント」、「自己効力感」からなる個人スキルに関する側面（5因子、各因子3項目の15項目）と「協調性」、「コミュニケーション」、「挨拶礼儀」、「感謝の気持ち」からなる社会的スキルに関する側面（4因子、各因子3項目の12項目）で構成されている。回答は、各項目について、「全くあてはまらない（1点）」から「よくあてはまる（5点）」の5段階で評定するように回答を求めた。なお、本尺度は既に信頼性と妥当性は確認されている（洪倉ほか, 2018）が、中学体育を対象とする本研究と高校運動部活を対象に行われた先行研究とでは対象者の学校種や認知する場面が異なるため、既存の因子構造モデルの妥当性や各因子の信頼性について再確認することとした。

3-2. 体育授業における動機づけ雰囲気の測定

藤田・杉原（2007）が作成した体育授業における動機づけ雰囲気について、「熟達雰囲気」（3項目）と「成績雰囲気」（3項目）の下位尺度から構成されている。回答は、各項目について、「まったくあてはまらない（1点）」から「非常によくあてはまる（7点）」の7段階で評定するように回答を求めた。なお、本尺度は既に信頼性と妥当性は確認されている（藤田・杉原, 2007）が、中学生を対象とする本研究と大学生を対象に行われた先行研究とでは対象者の学校種が異なるため、既存の因子構造モデルの妥当性と各因子の信頼性について再確認することとした。

4. 統計解析

因子構造モデルの妥当性検証は確認的因子分析によって行い、その際のモデル妥当性の判断には、GFI（Goodness of Fit Index）、CFI（Comparative Fit Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）の各適合度指標をもとに行うこととし、それらの基準は豊田ほか（1992）を参考に、GFIおよびCFIは0.90以上、RMSEAは0.10以下、そしてAGFIはGFIとの差分が小さいこととした。上記の適合度指標の基準は、動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係を検討する際に行う

共分散構造分析においても同様である。また男女による各下位尺度の得点はt検定によって比較検討した。統計的有意水準5%のもと、分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics22.0ならびにIBM SPSS Amos 22.0を使用した。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の確認的因子分析

体育授業における動機づけ雰囲気尺度の2因子構造モデルの妥当性を検討するため確認的因子分析を行ったところ、適合度はGFI=.97, AGFI=.93, CFI=.94, RMSEA=.08となり、すべての値で基準値を満たすことが確認された。続いてクロンバックのα係数を求めたところ「熟達雰囲気」はα=.64, 「成績雰囲気」はα=.57であった。

続いて、心理社会的スキル尺度の9因子構造モデルの妥当性について確認的因子分析を行ったところ、適合度はGFI=.82, AGFI=.77, CFI=.92, RMSEA=.07, となり、CFIおよびRMSEAは基準値を満たしたが、GFIは基準値を若干下回ることが確認された。また各尺度の信頼性として、クロンバックのα係数を求め、「忍耐力α=.79」, 「集中力α=.83」, 「思考力α=.83」, 「ストレスマネジメントα=.76」, 「自己効力感α=.91」, 「協調性α=.83」, 「コミュニケーションα=.77」, 「挨拶礼儀α=.81」, 「感謝の気持ちα=.75」であった。以上のことから、中学生を対象に体育授業場合における両尺度の信頼性と妥当性は概ね認められたと言える。

2. 各下位尺度の基本統計量

表1は心理社会的スキルならびに体育授業における動機づけ雰囲気に関して、男女それぞれに算出した各下位尺度の基本統計量と得点比較の結果である。まず男子と女子の群間で心理社会的スキルの各下位尺度得点を比較したところ、忍耐力(男子=11.70 ± 2.43点、

女子=10.84 ± 2.68点, $t(212) = 2.44, p < .05$)、思考力(男子=11.04 ± 2.51点, 女子=9.94 ± 2.30点, $t(212) = 3.34, p < .05$)、ストレスマネジメント(男子=11.12 ± 2.39点, 女子=9.85 ± 2.75点, $t(212) = 3.57, p < .05$)、自己効力感(男子=10.79 ± 3.16点, 女子=9.32 ± 3.29点, $t(212) = 3.34, p < .05$)、コミュニケーション(男子=11.11 ± 2.29点, 女子=10.22 ± 2.24点, $t(212) = 2.74, p < .05$)には有意な差が認められた。集中力(男子=12.00 ± 2.56点, 女子=11.65 ± 2.43点, $t(212) = 1.02, p < .05$)、協調性(男子=12.03 ± 2.54点, 女子=12.20 ± 2.27点, $t(212) = -1.52, p < .05$)、挨拶礼儀(男子=12.46 ± 2.34点, 女子=12.25 ± 2.16点, $t(212) = .68, p < .05$)、感謝の気持ち(男子=12.41 ± 2.28点, 女子=12.97 ± 1.79点, $t(212) = -1.97, p < .05$)には有意な差が認められなかった。続いて、体育授業における動機づけ雰囲気の下位尺度得点を男子と女子の群間でt検定を行った結果、熟達雰囲気(男子=15.97 ± 3.37点, 女子=14.91 ± 3.13点, $t(212) = 2.37, p < .05$)には有意な差が認められたが、成績雰囲気(男子=11.35 ± 3.53点, 女子=11.52 ± 3.83点, $t(212) = .35, p < .05$)には有意な差が認められなかった。

表2は体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの相関係数を男子と女子それぞれ算出した結果である。男子では、熟達雰囲気と忍耐力($r=.44$)、集中力($r=.38$)、思考力($r=.30$)、ストレスマネジメント($r=.32$)、自己効力感($r=.21$)、協調性($r=.56$)、コミュニケーション($r=.43$)、挨拶礼儀($r=.45$)、感謝の気持ち($r=.42$)に有意な正の相関が認められた。一方、成績雰囲気は心理社会的スキルの各下位尺度と有意な相関は認められなかった。女子は、熟達雰囲気と忍耐力($r=.43$)、集中力($r=.37$)、思考力($r=.36$)、ストレスマネジメント($r=.27$)、自己効力感($r=.41$)、協調性($r=.37$)、コミュニケーション($r=.34$)、挨拶礼儀($r=.22$)、感謝の気持ち($r=.24$)に有意な正の相関が認められた。また成績雰囲気は自己効力感($r=-.15$)、協調性($r=-.27$)、コミュ

表1 男子および女子の各下位尺度の基本統計量

	男子(n=108)		女子(n=106)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
体育授業における動機づけ雰囲気					
熟達雰囲気	15.97	3.37	14.91	3.13	2.37 *
成績雰囲気	11.35	3.53	11.52	3.83	-0.35
心理社会的スキル					
忍耐力	11.70	2.43	10.84	2.68	2.44 *
集中力	12.00	2.56	11.65	2.43	1.02
思考力	11.04	2.51	9.94	2.30	3.34 *
ストレスマネジメント	11.12	2.39	9.85	2.75	3.57 *
自己効力感	10.79	3.16	9.32	3.29	3.34 *
協調性	12.03	2.54	12.20	2.27	-1.52
コミュニケーション	11.11	2.29	10.22	2.42	2.74 *
挨拶礼儀	12.46	2.34	12.25	2.16	.68
感謝の気持ち	12.41	2.28	12.97	1.79	-1.97

* $p < .05$

ニケーション ($r=-.23$) と有意な負の相関が認められた。

3. 体育授業における動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係

体育授業における動機づけ雰囲気を独立変数に、生徒の心理社会的スキルを従属変数に付置したモデルを設定し、男子ならびに女子それぞれのモデル妥当性を検証するために共分散構造分析を行った。その結果、男子 ($GFI=.98$, $AGFI=.86$, $CFI=.99$, $RMSEA=.04$) および女子 ($GFI=.99$, $AGFI=.91$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$) ともにモデルの妥当性について基準を満たす十分な適合度が確認された。続いて、モデル内のパスについて確認すると、男子のモデルでは、熟達雰囲気は心理社会的スキルのすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており、協調性 ($\beta=.56$) へのパス係数が最も高く、続いて、コミュニケーション ($\beta=.46$)、次に、挨拶礼儀 ($\beta=.45$)、忍耐力 ($\beta=.44$)、感謝の気持ち ($\beta=.42$)、集中力 ($\beta=.38$)、思考力 ($\beta=.34$)、ストレスマネジメント ($\beta=.32$)、自己効力感 ($\beta=.24$) の順であった。一方、成績雰囲気は、思考力 ($\beta=.16$)、自己効力感 ($\beta=.15$) コミュニケーション ($\beta=.11$) の順でそれぞれ正のパスを示した。なお説明力を示す決定係数 (以下 R^2 とする) の値はそれぞれ、忍耐力 ($R^2=.19$)、集中力 ($R^2=.14$)、思考力 ($R^2=.12$)、ストレスマネジメント ($R^2=.10$)、自己効力感 ($R^2=.07$)、協調性 ($R^2=.31$)、コミュニケーション ($R^2=.20$)、挨拶礼儀 ($R^2=.20$)、感謝の気持ち ($R^2=.18$) であった。女子のモデルでは、熟達雰囲気は心理社会的スキルのすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており、忍耐力 ($\beta=.43$) へのパス係数が最も高く、続いて、自己効力感 ($\beta=.41$)、次に、思考力 ($\beta=.38$)、集中力 ($\beta=.37$)、協調性 ($\beta=.34$)、コミュニケーション ($\beta=.34$)、感謝の気持ち ($\beta=.28$)、ストレスマネジメント ($\beta=.27$) の順であった。一方、成績雰囲気は、感謝の気持ち ($\beta=.21$) で正のパスを、協調性 ($\beta=-.14$) で負のパスを示した。なお説明力を示す決定係数 (以下 R^2 とする) の値はそれぞれ、忍耐力 ($R^2=.19$)、集中力 ($R^2=.14$)、思考力 ($R^2=.14$)、ストレスマネジメント ($R^2=.07$)、自己効力感 ($R^2=.17$)、協調性 ($R^2=.16$)、コミュニケーション ($R^2=.12$)、挨拶礼儀 ($R^2=.05$)、感謝の気持ち ($R^2=.10$) であった。

IV. 考察

1. 男子と女子に共通する熟達雰囲気と心理社会的スキルの関係

体育授業における動機づけ雰囲気が熟達雰囲気と認知したとき、心理社会的スキルは男女とも正の影響を示すことが確認された。熟達雰囲気は技術の上達や進歩を成功とみなし、努力することや学習そのものに価値が置かれる。このことから、学習者は体育授業で成長や満足感を得るためには、自分なりに運動が上達する学習のプロセスを大切に、挑戦することや真剣な取り組みが必要であると示唆される。個人的スキルの獲得は、物事を様々な角度で見たり考えたり、難しいことにも集中して

粘り強く、また、問題に直面した時に自分なりの解決法を考えることができる環境 (雰囲気) であることが示唆された。そして自己効力感の高まりとして、上記の経験が今後の様々なことに対して自信を持って取り組むことができるスキルの獲得につながると考えられる。社会的スキルの認知は、体育授業で周囲の人と協力するために相手の立場を理解しようとする協調性やコミュニケーション、また仲間に正しい態度および仲間に感謝の気持ちを持つなど、仲間とともに努力することや、同じ課題や目標に向かって取り組む技能のプロセスの中で身につくと推察される。佐々木(2004;2012)によると、体育授業への適応感が高い生徒ほど社会的スキルも高いと期待できることや、スポーツ活動を通じて他者との関係性を良好にするためのスキルや苦しいことにも我慢強く取り組むためのスキル、また問題や課題を計画的に遂行するためのスキルが身につくと報告している。このことから、熟達雰囲気の環境下にある体育授業では、活動の内発的興味や持続性、努力への集中と深くかかわっていることから心理社会的スキルを高める要因になるのではないかと考えられる。

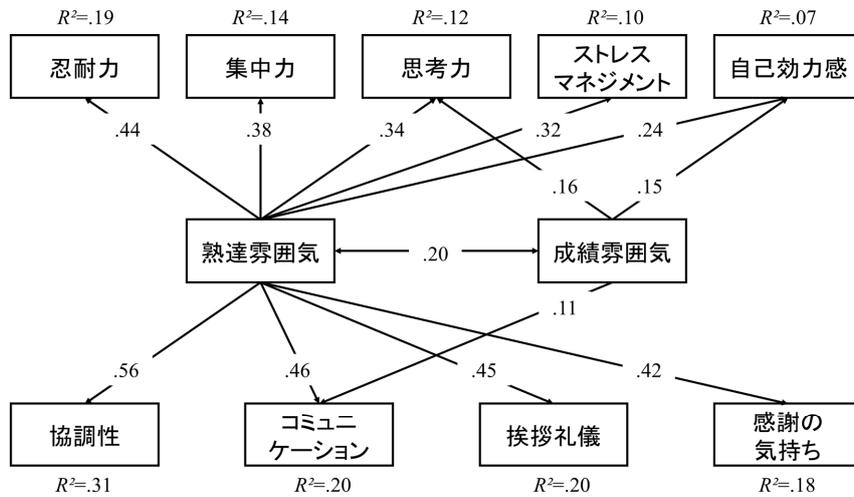
2. 男子にのみ確認された成績雰囲気と心理社会的スキルの関係

男子の体育授業における動機づけ雰囲気が成績雰囲気と認知したとき、心理社会的スキルの個人的スキルである「思考力」と「自己効力感」、社会的スキルである「コミュニケーション」が高まることが確認された。成績雰囲気は他者よりよい成績をとることを成功とみなし、他者より高い能力を示すことに価値が認められる雰囲気であることから、学習者が体育授業で他者と比較したり、自分の成績に注意が向けられ、他者より優れた結果を残すことで満足感を得ることができるのではないかと考えられる。つまり、他人に勝つためにはどうすれば勝つことができるのかを考え、自分の能力を分析し、自分が勝負に勝てる相手を見つけ、その結果から満足感を得ようとする傾向があると考えられる。また勝負後に、相手と結果に基づいたコミュニケーションを図り、自身の有能感を示そうとするのではないかと示唆される。このことは、外山 (2007) によると、男子はテストの順位や通知表の成績を比べる「遂行比較」が女子よりも有意であることが報告されていることや、徳永・橋本 (1980) は、楽しさを感じる程度には運動の基本的欲求の充足や人間関係があり、特に競争に高い得点があることが認められることを報告しており、男子に見られる特徴として「スリル感、進歩・向上、競争」が楽しさを感じる程度が高いことを報告していることから推察される。これらのことから、男子の成績雰囲気の環境下にある体育授業で、相手より有能さを示すためには、どうすれば自信をもって取り組むことができるのかを考え、相手とコミュニケーションをとることで順位や結果に対しての有能感を得る傾向があることが考えられる。

表2 男子および女子の相関係数

	男子		女子	
	熟達 雰囲気	成績 雰囲気	熟達 雰囲気	成績 雰囲気
忍耐力	.44 *	-.04	.43 *	-.15
集中力	.38 *	.06	.37 *	-.06
思考力	.30 *	.19	.36 *	-.14
ストレスマネジメント	.32 *	.06	.27 *	-.17
自己効力感	.21 *	.14	.41 *	-.15 *
協調性	.56 *	-.01	.37 *	-.27 *
コミュニケーション	.43 *	.14	.34 *	-.23 *
挨拶・礼儀	.45 *	.10	.22 *	-.07
感謝の気持ち	.42 *	.09	.24 *	.08

* $p < .05$



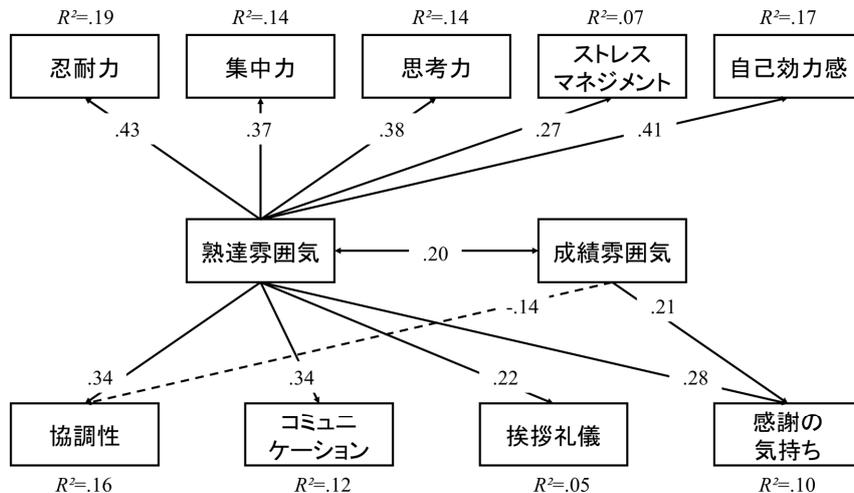
適合度指標: GFI=.98, AGFI=.86, CFI=.99, RMSEA=.04

†パス上の数値はすべて標準化推定値(いずれも $p < .05$ で有意).

††実線は正の値を示したパスである.

†††モデル内の誤差変数は省略.

図1 動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係 (男子)



適合度指標: GFI=.99, AGFI=.91, CFI=1.00, RMSEA=.00

†パス上の数値はすべて標準化推定値(いずれも $p < .05$ で有意).

††実線は正の値を示したパス, 破線は負の値を示したパスである.

†††モデル内の誤差変数は省略.

図2 動機づけ雰囲気と心理社会的スキルの関係 (女子)

3. 女子にのみ確認された成績雰囲気と心理社会的スキルの関係

女子の体育授業における動機づけ雰囲気が成績雰囲気と認知したとき、心理社会的スキルの社会的スキルである「協調性」が低下し、「感謝の気持ち」が高まることが確認された。女子が成績雰囲気を認知した体育授業で満足感を得るためには、与えられた課題や状況などに対して良い結果を残すために他人に負けたくない気持ちが高まるため、周囲の仲間と一緒に行動する協調性が低くなる。一方、自分を成長させてくれた仲間へ感謝の気持ちを持つことができるなどによる両面性もあると考えられる。女子は、体育授業場面で優劣がつくことや評価されることを嫌うことから、試合など緊張する場面になるとビクビクしたり、落ち着かなくなることがあること（春日ほか, 2019）、仲間から運動についてアドバイスをしてほしいと言われて困ってしまい、個人的苦痛を感じる傾向がみられることや、運動をしていて、自分が正しいと思ったら、仲間の言うことは聞かないなどの傾向があること（藤谷, 2010）などが報告されている。このことから、成績雰囲気の体育授業の環境下が、協調性に負の影響を示したのではないかと推察される。また、女子の成績雰囲気の環境下にある体育授業では、仲間との関わりを重視している態度が高い（伊藤, 1996）と報告しており、授業の中で仲間が自分を成長させてくれたことに感謝に気持ちを持つことができる反面、評価されることへの失敗を恐れ、積極的に仲間と協調して行動することに難色を示す傾向があるのではないかと推察される。

V. まとめ

本研究の結果は、①男子および女子ともに体育授業における熟達雰囲気から心理社会的スキルの全てのスキルに正の影響を示すことが確認された。②成績雰囲気と心理社会的スキルの関係については、男子では成績雰囲気から心理社会的スキルの「思考力」「自己効力感」「コミュニケーション」に正の影響を示すことが確認された。③女子は成績雰囲気から心理社会的スキルの「感謝の気持ち」に正の影響、「協調性」に負の影響を示すことが確認された。これらのことから、体育授業において熟達雰囲気を強調することが、男女とも心理社会的スキルが高まることが示唆された。一方、体育授業において成績雰囲気を強調することは、男子にとっては一部の心理社会的スキルを向上する要因になることは確認できたが、女子にとっては周囲と歩調を合わせない自分勝手な行動をとるなど、協調性スキルを低下させる可能性があることが示唆された。つまり、心理社会的スキルを高める要因として熟達雰囲気を中心とした授業が必要になるだろう。一方で成績雰囲気の心理社会的スキルを高める有効性については一部の生徒には認められるが、すべての生徒に共通していないことから、現段階では十分な有効性が認められていない成績雰囲気を強調した授業づくりは抑える必要がある。

参考文献

- 藤谷かおる（2010）体育授業における共感性の構成因子の検討 - 性差および校種間差の観点から - 日本教科教育学会誌, 33 (2), 11-20.
- 藤田勉・杉原隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ. 体育学研究, 52, 19-28.
- 伊藤豊彦（1996）スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. 体育学研究, 41, 261-272.
- 伊藤豊彦（2017）体育学習における教師行動が児童の動機づけに及ぼす効果に関する研究 - 自己決定理論からの分析 -. 体育科教育学研究, 33 (2), 35-47.
- 春日晃章・大坪健太・鈴木康介・渡邊雄介・小長谷研二（2019）中学校女子の体育授業における身体活動量の個人差および種目間差, 19, 30-38.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生（2017）高校体育における動機づけ雰囲気および目標志向性が生徒の体育授業満足感に与える影響. 体育学研究, 62, 297-312.
- 西田保・佐々木万丈・北村勝郎・磯貝浩久・渋谷崇行（2014）スポーツ活動における心理社会的効果の日常生活への般化. 総合保健体育科学, 37 (1), 1-11.
- 佐々木万丈（2004）中学生の体育授業における社会的スキルの分析：性、学年、体育授業への適応感に着目して. 体育学研究, 49, 423-434.
- 佐々木万丈（2019）第7章スポーツとライフスキル 基礎から学ぶスポーツの心理学. 勁草書店, pp.129-153.
- 佐々木万丈・西田保・北村勝郎・磯貝浩久・渋谷崇行（2012）小学生および中学生のスポーツ活動による心理社会的効果とその日常生活への般化の実態. 日本女子体育大学紀要, 43, 139-152.
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈・北村勝郎・磯貝浩久（2018）高校運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化：3時点での交差遅れ効果モデルによる検討. 体育学研究, 63, 563-581.
- 外山美樹（2007）中学生の学業成績の向上における社会的比較と学業コンピテンスの影響 - 遂行比較と学習比較 -. 教育心理学研究, 55, 72-81.
- 徳永幹雄・橋本公雄（1980）体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究. 健康科学, 2, 75-90.
- 上野耕平（2011）体育・スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究の現状と今後の課題. スポーツ心理学研究, 38, 109-122.